

アカデミック・アドバイジング研究

第3号

2025

日本アカデミック・アドバイジング協会

アカデミック・アドバイジング研究 第3号

目次

実践報告

留学教育におけるアカデミックアドバイジングの役割：

単位認定制度とキャリア形成を中心に

柴田 弓子

..... 1

学生アドバイザーの育成につながる実践：

中学生に向けたキャリア教育を事例として

岸岡 洋介

..... 11

編集後記

留学教育におけるアカデミックアドバイジングの役割： 単位認定制度とキャリア形成を中心に

柴田 弓子
(北九州市立大学)

要旨

本論文は北九州市立大学外国語学部英米学科における留学教育の一環として実施されているアカデミックアドバイジングの事例を報告するものである。同学科では、英語による学術科目授業（EMI：English-Medium Instruction）を中心とした教育課程に加え、海外の大学や教育機関での教育研究活動、ならびに異文化・語学研修プログラムへの参加を卒業要件としてカリキュラムの一部に組み込んでいる。世界の一体化が進む中、高等教育の国際化と学生の移動が活発化している。言語学習のみならず多様性や異文化環境での学修を通して培われる非認知スキルの向上が期待されており、グローバル人材の育成を目的とした日本人学生の海外留学の推進は文部科学省、官民協働、地方自治体、そして各大学でも様々な取り組みが行われている。しかし、日本の大学で留学を志す学生が直面する課題は依然として多く、特に就職活動の早期化と長期化、単位認定制度の不備が留学の阻害要因として挙げられている。本稿では、これらの課題を踏まえて単位認定制度と学生のキャリア形成に焦点をあて、どのような海外学修支援が望ましいのかについて探る。

キーワード

学修支援, 留学, 海外インターンシップ, 単位認定, キャリア形成

1. はじめに

グローバル化により、国際交流や留学などの学生の国際移動が広がり高等教育に大きな影響を与えている。学生の異文化理解や国際的視野の醸成を図るため、留学生の受入と派遣を通じて国境を越えた学術交流が活発に行われ、これを支える制度として海外教育機関で修得した単位の認定制度や各大学の教育プログラムの国際化の取組が高等教育で導入されている。また、学生や研究者の国際流動性を促進する動きとして欧州とアジアを中心に非英語圏の大学でも英語による授業（EMI）科目が増加しつつある（Rose & McKinley, 2017）。

日本の大学教育においては国際的な視野を持った人材の育成が重要視されるようになってきている。こうした流れの背景には、文部科学省が掲げる「世界的な企業を生み出す力」や「国際共同研究を進める力」、「外交を通じて国際社会と対等に交渉できる力」といったグローバルコンピテンシーの育成が含まれている（文部科学省, 2023）。学部単位で海外学修を必須化する大学は国際系の学部を有する 15 の私立大学、国公立大学では 6 大学 6 学

部と導入が進んでいる（落合, 2020）。大学間協定に基づく海外学修プログラムの目的や期間、活動内容などその形態は大学によってさまざまである。約1年間の海外協定大学での学部課程の科目履修を中心とした交換留学、1学期間の語学科目と学部課程の科目履修を組み合わせた派遣留学のような中長期のプログラムや、1か月未満の語学研修やスタディツアーのような短期のプログラムも含まれる。日本学生支援機構（JASSO）が実施した「大学間協定に基づく日本人学生留学状況調査」では、2022年度の海外留学状況は58,162人で新型コロナウイルス感染症によるパンデミック以前の2019年度の107,346人（全体の留学者数）と比較して約半数であったものの、3か月以上の中長期の留学者数は上記2019年の留学者数の約90%と回復傾向にある（文部科学省, 2024）。オンラインによる国際協働学習などの取組が過去数年間に渡り急速に促進されてきたことを踏まえると「現地渡航型の留学でしかできないことは何か」が問われている。これは単に学生が海外での留学や海外インターンシップを体験するというだけではなく、海外学修を通じて得られる知識やスキルを学生が将来に活かすことを目的とすることを意味している。その海外学修経験を通じた成長を支えるためには、適切な履修指導や単位認定のサポートが必要である。

本稿では、留学教育におけるアカデミックアドバイジングの役割に焦点を当て、特に単位認定制度とキャリア形成における重要性について検討する。アカデミックアドバイジングがどのように学生の学びの質を向上させ、留学後のキャリア形成に貢献するのかを明らかにすることで今後の高等教育における留学支援体制の充実に向けた示唆を提供することを目的とする。

2. 海外学修とアカデミックアドバイジング

2.1. 留学教育における学修支援の課題

留学や国際活動に関わる支援としては大学の国際教育部門の職員が担当することが多いが、学修支援を専門とするスタッフがアカデミックアドバイザーとして学生の指導を行っている場合もある。学習支援の専門職化が確立されている米国大学に関する調査研究を行った清水（2015）は、学習者の将来や学術面の目標をサポートする教育カリキュラムの一部としてアドバイジングが位置付けられており「学習に関連する情報の提供」と「履修指導・相談」が含まれると報告している。国際的な移動を伴う留学教育においては、原籍大学のみならず留学先や海外インターンシップ先など目的地での学修目標を達成するための情報や履修指導が重要となる。先に述べた高等教育における国際化を背景に、学部教育課程の一環として位置づけ卒業要件に海外学修を含める日本の大学がある一定数存在し、学部生の在学期間中に占める各種海外プログラムの学習期間や現在の経済事情、キャリア形成に係る社会的背景を考慮すると、海外学修という文脈を踏まえたアカデミックアドバイジングが求められていると言えるのではないだろうか。

著者が所属する学科では、在学中に大学が提供する短期および中長期の留学プログラムや単位取得を伴う私費留学の修了をもって卒業要件である「留学国際活動科目」の単位認定を行っている。ただし、健康上の理由などで在学中に各種プログラムに参加することができない場合は学科が提供するプロジェクト型の専門科目の単位修得でもって上記要件を満たすことが可能となっている。1年次では少人数クラス編成による英語集中教育、2年次以降は専門科目（7割以上の科目は英語で教授）を受講し、Language and Education

Program、Society and Culture Program、Global Business Program の 3 つの専門領域プログラムに分かれ、所属するプログラムの科目群から所定の単位数を履修する。これらの課程で学んだことを実践する場として留学や海外インターンシップなどの海外活動を奨励し、大学の国際教育交流センターと連携しながら学修支援を行っている。

在学中の留学や海外インターンシップへの参加は、学生にとって大きな挑戦であり成長の機会となり得る。しかし、留学が就職活動に与える不利な影響、経済状況の悪化による留学費用の負担増、異国での生活に伴う不安感などのさまざまな要因が、海外学修プログラムへの参加の障壁を高めている。こうした状況を踏まえ、学生には十分な情報収集と準備がこれまで以上に求められている（張, 2023）。相談に来る学生の中には、入学前に留学あるいは海外在住経験のある学生もいれば、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックの影響を受け、今回が初めて海外に出る学生も多くいる。相談内容は、留学先でのプログラム内容や単位交換に関すること、就職活動や教育実習との兼ね合いからプログラム参加の時期に関すること、さらには奨学金や補助金などの資金面に関することなど多岐にわたる。

国際学修は、現地での学習や活動といったプログラム期間中の経験に注目されがちである。しかし、留学の成果は留学中の経験そのもの以上に、そこで得た知見をどのように活用し、帰国後の生活や学びに反映させるかによって明らかになるという研究結果もある（Rowan-Kenyon & Niehaus, 2011）。また、正楽（2020）は海外留学による学習成果には外国語運用能力、コミュニケーションスキル、異文化適応力の向上が含まれるが、これらの能力は留学するだけで自動的に習得されるものではなく、留学先での個人的な体験そして体験から得た経験を内省する過程を通じてはじめて培われる能力であると示している。さらに、学習者と教育者が学習の目標を意識していなければ学修成果の達成は困難であるため、留学を通じて学生が認識する学習成果(achieved learning outcome)を向上させるためにいかなる教育が求められるのかについて考察する必要があるとしている（正楽, 2020）。

これらの先行研究からも、国際学修はプログラム単体で完結するものではなく、参加に至るまでの準備、事前事後学習や帰国後の活動など連続性のあるプロセスであるということが分かる。上記の点を踏まえると、学生の将来の目標や進路を見据え、大学の教育課程との調和を考慮しながら統一性、一貫性のある学修支援を留学教育として行っていくことが望ましいのではないだろうか。

2.2 海外協定大学における学習方法の変化

留学に求める学生のニーズや目的は多様化しつつある中において、情報は重要なリソースとなる。支援をする側は情報を必要とする対象者に対して質と量、タイミングをよく考えて提供していく必要がある。パンデミックによる行動制限により国際的な学生交流は空白期間が生じたものの、2022年からは留学プログラム（交換留学、派遣留学、語学研修）や海外インターンシップを含む海外学修・体験プログラムが再開し、帰国学生の実体験に基づいた現地での学習や学生生活に関する生きた情報が蓄積されつつある。

2023年度のプログラムに参加した学生27名の事前・事中・事後のインタビュー調査と海外協定大学での現地調査で明らかになったことは、パンデミック以前と比べオンライン

を活用した教授や学習がより多く導入されているという点がまず挙げられる。米国の協定大学では、パンデミック後も対面とオンライン授業の両方を提供し履修登録をする際に学生がどちらか選択できるようになっている場合やコースの一部がオンライン授業となっているものもある。また、Canva等のオンラインデザインツールを使用することがマーケティングの課題を提出する上での条件として含まれるなど IT リテラシーの育成を念頭に置いたコース設計を行っている点も見受けられる。英国の協定大学では、対面授業を基本としているがパンデミックを機に全ての授業を録画するシステムが導入された。録画された授業は学習管理システム(LMS)上にアップロードされるため、学生は繰り返し講義動画を観て学習することができるようになっている。教材提供もすべてオンライン化されており、学生はLMS上に提示してあるリンクでデジタル教科書や参考文献にアクセスするため紙媒体の教科書を購入することはない。

オンライン化が進んでいるのはコース内容そのものだけではない。留学前のコースの履修登録や入寮の手続きなども、協定大学が本学の学生を留学生として受入を決定し、学生番号を発行した後、各学生にメールを通じて連絡し、各大学のオンラインシステムの中で行われる。学生は割り振られたアカウントIDで各々の留学手続きや履修登録を進めていくため、教職員がどの程度手続きが進んでいるのかを把握することは難しく学生本人から直接相談を受ける以外にはない。また、留学先によって学年暦や履修スケジュール、履修登録や方法も異なるため、履修計画や現地で履修内容を軌道修正する際に必要となる基本情報を予め学生に伝えておくことも重要である。予備知識により学生が現時点から卒業までの見通しが立てやすくなること、またオンライン上で個別に留学手続きを進めていく過程でさまざまな質問が出てくるのが想定されるが、同じ留学先への渡航を予定している学生同士の情報共有を促進する上でネットワークを早い段階で築いておくことは望ましい。これらの点を踏まえ、学科内の留学予定者全員を対象とした「履修計画と単位認定に関するガイダンス」を実施することにした。

2.3 履修計画と単位認定に関するガイダンス

ガイダンスは留学予定学生の選考後、なるべく早い時期、秋留学であれば1学期が始まる直前の4月初旬、春留学であれば2学期が始まる直前の9月中旬に開催し履修登録前までに参加してもらうように設定した。その理由は、一旦新学期が始まると、授業、留学に関する準備(事務手続きを含む)、課外活動やアルバイトなどが同時並行で進んでいくため、履修について落ち着いて考える時間の余裕がなくなることが多いためである。あらかじめ履修する科目がパッケージ化されている特別プログラム以外の交換留学、派遣留学プログラムの留学先での学習内容は各学生が設計し履修する科目を自由に選択できる。このような自由度が高い点は魅力である一方、情報収集力には個人差があるため学生の主体性に任せておくだけでは総体的な海外学修の効果を高めることはできない。また、留学予定の学生は2年生から4年生まで学年がそれぞれ異なるため、原籍大学の履修に関する基本的な情報を再確認することは学生自身が卒業や進級への道筋について理解を深めることにもつながる。

さらに、これまでの各協定大学別の単位認定に関する実績情報や留学先での履修計画についてある程度方向性が見えることで「留学前の1学期間で履修すべき科目」が明確にな

るという点も挙げられる。特に2年生で留学し4年間での卒業を希望する学生については、単位修得数と3年生への進級の関係から履修計画を綿密に立てておくことが重要となる。本研究で取り上げる大学の留学プログラム参加学生を対象とした「履修計画・単位認定に関するガイダンス」の概要は付録に示す。

2.4 ガイダンス参加者を対象としたアンケート結果

「履修計画・単位認定に関するガイダンス」に参加した秋学期から留学予定の学生45名にアンケートを実施したところ、37名（回答率82.2%）からの回答を得た。質問内容は以下の通りである。

1. 本日のガイダンスで説明した内容は留学の履修計画・単位認定について理解を深めるのに役立ちましたか？

● とても思う	30
● やや思う	7
● どちらともいえない	0
● あまりそう思わない	0
● まったくそう思わない	0

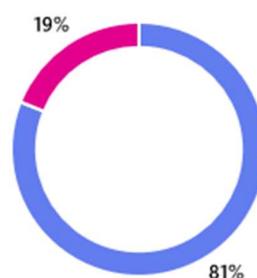


図1 ガイダンスの有用性

2. 履修計画や単位認定の概要についてどの程度理解できましたか？

● 十分に理解できた	13
● ある程度理解できた	24
● どちらとも言えない	0
● あまり理解できなかった	0
● 非常に難しかった	0

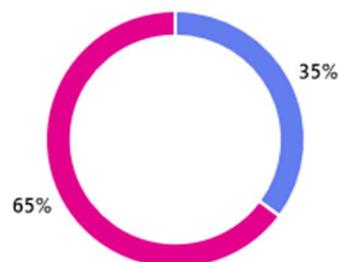


図2 履修計画・単位認定の理解度

3. 今後履修計画や単位認定についてどのような情報があれば有益だと思いますか？
(一部抜粋)

- ・過去に留学した先輩がおすすめする授業の情報や単位認定に至らなかった具体例
- ・単位認定された科目の評価が成績評価係数（GPA）へどのように反映されるのか
- ・留学での履修科目によるゼミ選択への影響
- ・他学部他学科の単位認定実績
- ・留学先大学の授業の難易度に関する詳細情報

アンケート結果から、ガイダンスに参加した学生は「留学に関する履修計画と単位認定についての概要を把握するのに有用であった」と認識していることが示された。このように事前に基本情報を知ることによって留学前の学期で履修登録すべき科目（原籍大学）と留学先での履修科目を選択する際にどのような方法で何を調べればよいのか目途が立つことにより、次のステップである留学先に受入が決定した後に実施する個別面談では、留学先での履修計画と単位認定についてより具体的で最適化された内容で学生に助言をすることが可能となる。

2.5 学生の個々のニーズに応じた海外学修支援

留学や海外インターンシッププログラムに参加する学生の動機や学習目的、進路や将来の目標はさまざまである。また、語学力や異文化に関する学生のバックグラウンドは多様であるため、学生個人の目標に応じた個別の指導が必要となる。先に述べたとおり本学科では3つのプログラムから学生が各分野を選択し専門科目を英語で学ぶカリキュラムを組んでいる。その中でも「英語学・英語教育」プログラムでは英語の教員免許取得のため教職課程を履修している学生が比較的多く、教職課程と留学をどう両立するかが相談の中心となる。免許状取得に必要な教職科目の単位を履修しながら海外留学を実現するには、「留学プログラムへの参加時期」と「留学で修得する科目の単位交換がどの程度可能か」が重要な要素であるため、学生が希望する卒業時期と既に修得している科目や単位数を確認しながら「どの留学プログラムにいつ参加するのがベストであるか」を提案するようにしている。例えば教職課程を履修し4年間での卒業を希望する学生については、カリキュラムと単位互換の両方を考慮し2年生で留学することを勧めている。

中等・高等教育の現場では英語の授業を英語で教授する学校も増えてきており（山森, 2013; 文部科学省, n.d.）、ある一定期間母国を離れ、多様な文化背景をもつ学生との交流を通して経験学習を行うことは、将来教壇に立つ可能性のある学生にとって語学力と異文化に対する感受性向上の点から有意義なものになると考えている。

一方、グローバル・ビジネスのプログラムに所属する学生や所属を希望する1、2年生については、観光学（ツーリズム）や会計学といった専門分野での資格取得を意識した海外学修を希望する学生も少なくはない。本学の海外協定大学であるハワイ大学カピオラニコミュニティカレッジのホスピタリティ・ツーリズム学科（Hospitality and Tourism Education Department）ではホスピタリティや観光学に関する専門知識と職業訓練を含む実践的な学習コースを提供し、所定の単位数を修得することによって資格が得られるプログラムを提供している。学部学科の性質上、観光や航空業界でのキャリアを目指し入学する学生は比較的多く4年間で卒業するために1学期間の留学プログラムに参加を希望する学生からの履修計画についての相談がよく寄せられる。3年生は上記分野の専門科目を2年生で履修済みであることが多いため現地での履修のハードルはそれほど高くはない。しかし、専門科目の修得単位数が限定的である2年生が留学先での履修計画を立てる際には、難易度や学習量の負荷を考慮し、入門レベルの専門科目履修を経てから上位レベルの専門科目を履修するように勧めている。

イギリスのカーディフ大学ビジネススクールでは、経営学や国際ビジネス、マーケティング

ングといったビジネス分野の専門科目が幅広く提供されている。所属ゼミで学んだビジネスに関する知識をさらに深める目的で 3、4 年生が留学する場合は選択できる科目も多く現地の学生とのグループワークやプレゼンテーション、エッセーの提出などの課題も含め履修に関してはあまり差支えないが、2 年生では先に述べた専門科目の履修状況によってはビジネス科目のみを履修することはハードルが高い場合もある。派遣留学生として選考される前であればビジネスの専門入門科目や学生が選択したいと考えている領域のビジネス科目を履修した上で留学プログラムに応募することを勧めるが、既に選考されている場合は現地の大学が提供する入門レベルのビジネス科目から履修するように促している。また、当協定大学では留学生が多く学んでいる現代言語学部が提供するコースも一部受講できるシステムになっているため、学習量の負荷を考慮し 1 年間の留学期間の最初の学期には上記学部のコースを含めて履修するといったアドバイスも行っている。

3. 海外学修と学生のキャリア形成

留学プログラムに加え海外インターンシップを含む海外学修は、本学の大学生協同組合（大学生協）が実施運営を行っているプログラムが本学科の単位認定の対象となっている（ただし、休学せずにプログラムに参加した場合のみ）。協定大学でのビジネス科目を中心とした学術面での学びと実務経験を通して実践的なスキルや知識を習得する機会が提供されるという両方の点からインターンシップを選択する学生も多い。これらのプログラムに 2023 年度は本学科の学生から 18 名が参加したが、帰国後インタビュー調査では、「インターンシップを通じて業界や職種に関する理解を深め、自身のキャリアパスを具体的に描く手助けになった」、「自分の語学力でどの程度仕事ができるのか、あるいはできなかったのかが分かった」、また世界各国から海外インターンシップに参加している学生との共同生活や業務を通じて「積極的に自分自身の考えを相手に伝えることの重要性を学んだ」の 3 点が共通していた。

海外インターンシップに参加した学生が認識したキャリアについての意識変化に関する研究は、天木（2016）と千葉（2010）が実施した調査があるが、いずれも「海外を舞台に活躍したいか」という質問に対して「強くそう思う」、「ややそう思う」と回答した学生の合計が 9 割であった。さらに、現地での多様な学生との交流やインターンシップ先の企業における経験を通じて、国際的な視野や幅広い教養を身につけるために、学生自身が主体的に思考し行動する積極性を身につけていることが確認されたと報告している（天木、2016）。しかし、矢崎・中村（2013）は学生がインターンシップに参加する際に明確な目的や目標を持たない場合インターンシップで得られた成果を十分に認識することが難しくなり、その後の就職活動や学生生活への良い影響にはつながりにくいとの調査結果を示している。これらの先行研究から、「事前教育における目的意識の明確化」と「学び体験したことを振り返る事後学習」の重要性が示唆される。

キャリア形成において、留学や海外インターンシップは、学生が自身のキャリアパスを具体的に描く機会を提供する可能性があると同時に課題も抱えている。特に、日本の大学生にとって経済的な負担が留学決断の障壁となる場合が多い。留学には学費に加え渡航費や滞在費などの費用がかかるが、世界経済の状況により個人負担は年々増加しつつある。経済的負担が増大する中で家族や奨学金に頼る学生も多いが、これだけでは不十分な場合

もあり、学生が留学を断念せざるを得ないケースも見られる。さらに、留学期間によっては就職活動時期が遅れるなど、早期化・長期化している日本の就職活動との兼ね合いが難しくなることも懸念されている（小川, 2019）。

一方で、キャリア形成におけるもう一つの重要な側面として、学生が留学や海外インターンシップを通して自己の職業的な方向性や価値観の認識などのキャリアアイデンティティがより明確化できるという点がある。インターンシップ参加者が異文化環境での業務経験やチームワークを通じて自己の強みと弱みを把握することで、自分がどのような職業に適しているか、あるいは自分がどのようなスキルをさらに高めるべきかという具体的な課題が浮き彫りになる。また、現地での実務経験を通じて、学生は自己の適性を再確認し、自らの職業的方向性を具体化する助けとなる。こうした経験を通じ、学生は日本国内での就職活動やその後のキャリア形成において自信を持って行動できるようになり、結果として積極的にキャリア構築に取り組む意識が高まったのではないかと考える。

このように、留学や海外インターンシップはキャリア形成において重要な役割を果たす一方で、経済的負担や就職活動時期に関する課題もある。これらの課題を踏まえるとアカデミックアドバイジングを実施する際には事前に学生に目的意識を持たせるとともに、費用や将来的なキャリアに対する不安を軽減する支援が必要であることが示唆される。

4. 考察とまとめ

本稿では、北九州市立大学外国語学部英米学科における留学教育の実践を通じて、アカデミックアドバイジングが単位認定および学生のキャリア形成において果たす役割について検討を行った。その中で、以下の2点に着目した重要な示唆が得られた。

第一に、海外の大学で修得した単位認定の実績情報の共有は、学生にとって効率的かつ計画的な履修を可能にする効果がある点である。本学の履修計画・単位認定に関するガイダンスに参加した学生からは、単位認定可能な科目の具体例や過去の実績情報が非常に参考になったとの声が多く寄せられた。これにより、学生は留学前に必要な情報を効果的に収集し、どの科目を履修すべきか、どのように計画を立てるべきかを明確にすることが可能となった。また、単位認定情報の共有は、学生の学修への意欲を高めるとともに、不安感を軽減し、自信を持って留学に臨むための一助となることが確認された。

第二に、今後の展望として、アカデミックアドバイジングの質をさらに高め、単位認定とキャリア形成を一層円滑にするための課題が浮き彫りとなった。具体的には、以下の点が今後の課題として挙げられる。(1) 留学希望者の多様化するニーズに応じた個別指導の拡充、(2) 学生のキャリア形成を支援する事前教育および事後学習プログラムの充実、(3) 単位認定手続きのさらなる効率化と透明性の向上、である。また、帰国後のアドバイジングにおいても、留学経験が学生のキャリアアイデンティティにどのように結びつくかを深く掘り下げる支援が求められる。

本研究を通じて明らかになったように、留学教育におけるアカデミックアドバイジングは、単なる履修支援や単位認定に留まらず、学生のキャリア形成を含む全人的な成長を促進する重要な役割を担っている。将来的には、オンライン技術やデータベースを活用した情報提供の充実、さらには他大学や企業との連携による支援体制の強化も期待される。このような取り組みを通じて、留学を目指す学生の挑戦を後押しし社会で活躍するための基

盤を提供することができるのではないだろうか。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 23K02529 の助成を受けたものです。

参考文献

- Rose, H., & McKinley, J. (2018). Japan's English-medium instruction initiatives and the globalization of higher education. *Higher Education*, 75, 111-129.
- Rowan-Kenyon, H. T., & Niehaus, E. K. (2011). One year later: The influence of short-term study abroad experiences on students. *Journal of Student Affairs Research and Practice*, 48(2), 207-222.
- 天木勇樹 (2016) 「短期就業体験型の海外インターンシップによる学生の意識の変 (グローバル人材として必要な素養を醸成するために何をすべきか)」 『グローバル人材育成教育研究』 3(1), 40-49.
- 小川勤 (2019) 「日本におけるグローバル人材育成の課題 : 大学教育カリキュラムと日本固有の社会システム」 『大学教育』 16, 1-6.
<https://cir.nii.ac.jp/crid/1050282677779966720>
- 落合知子 (2020) 「全員留学の効果と課題—日本学生支援機構海外留学支援制度へ提言—」 『留学交流』 107, 10-20.
- 清水栄子 (2015) 『アカデミック・アドバイジング その専門性と実践 : 日本の大学へのアメリカの示唆』 東信堂.
- 正楽藍 (2020) 「大学生の留学動機と学習成果: 汎用的技能に着目して」 『大學教育研究』 28, 11-27.
- 千葉隆一 (2010) 「文系大学での海外インターンシップの意義・効果についての考察—文京学院大学外国語 学部・文京学院短期大学の事例—」 『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』 10, 207-224.
- 張銀暁 (2023) 「日本におけるグローバル人材育成の課題と展望: グローバル人材に求める資質と留学生交流の現状を中心に」 『Global studies』 7, 149-64.
- 文部科学省 (n.d.) 「5. 英語教育の改善・充実について」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/112/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2016/06/06/1371754_5.pdf
- 文部科学省 (2023) 「せかい×まなびのプラン」
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/sekaimanabi/index.html
- 文部科学省 (2024) 「外国人留学生在籍状況調査及び日本人の海外留学者数等について」.
https://www.mext.go.jp/content/20240524-mext_kotokoku02-000027891.pdf
- 矢崎裕美子・中村信次 (2013) 「インターンシップ経験によるコンピテンシーの変化—動機と研修の型からの検討—」 『日本福祉大学全学教育センター紀要』 1, 3-9.
- 山森直人 (2013) 「高等学校英語科授業における教師の英語使用に関する調査」 『鳴門教育大学研究紀要』 28, 49-63.

付録

履修計画・単位認定に関するガイダンス

1. 履修計画・単位認定に関する概要説明
 - 留学前の履修計画、留学中の履修変更（留学での学びをどのように設計するか？）
 - 帰国後の単位認定（海外学修の単位化の方法やプロセスは？）
 - 情報収集の方法（留学先大学の科目はどのように調べる？）
2. 質疑応答（Q&A）
3. 帰国学生との交流（情報共有、相談）

1. 「履修計画・単位認定に関する概要説明」の内容

1.1 単位認定とは？

単位認定の定義、仕組み、履修計画と単位認定に必要な情報

1.2 留学に係る履修計画・相談・登録の流れ（留学前スケジュール）

1.3 留学での学びをどのように設計するか？

A 専門的な科目を中心に履修し、領域に関する知識を深化

B 他の学問分野の科目を履修し、多角的視野を広げる

C 語学力や異文化理解力の向上を目的とした科目を中心に履修

※上記類型はこれまでの単位認定実績を分析し例として示しているが、学生の希望に応じた柔軟な設計が可能である。

1.4 単位認定の実例

類型別に、学年、所属プログラム・ゼミ、協定大学の情報を加えた事例を紹介

1.5 留学先大学の履修科目の選定ポイント

学問分野の関連性、難易度、履修の前提条件、課題や評価方法、履修科目数

1.6 留学先大学が提供する科目についてのリサーチ方法、単位認定実績の活用

1.7 原籍大学での履修計画（留学前の学期）

科目の互換性、科目配当年次の単位交換制限、ゼミや卒業論文の履修登録に関する注意点、教職課程を履修している場合の単位交換や成績評価

1.8 相談担当教員の紹介

履修計画、留学期間中の履修変更、帰国後の単位認定に関する担当教員の情報

1.9 留学中～帰国後の単位認定作業の流れ

2. 質疑応答（Q&A）

ガイダンス開始前に Slido（スマートフォンを使って匿名で質問を投稿することができるオンラインプラットフォーム）の QR コードを提示しておき、概要説明の間に学生から投稿された質問に回答する。

3. 帰国学生との交流

留学先別にグループに分かれ、海外協定大学での留学を終え帰国した学生が進行役を務め意見交換を行い、現地での生活や学習について具体的な情報を共有する。

学生アドバイザーの育成につながる実践：

中学生に向けたキャリア教育を事例として

岸岡 洋介
(京都外国語大学)

要旨

学生同士による支援いわゆるピア・サポートにおける教育的な効果は多くの指摘がある。しかし、そのサポートを担う学生スタッフ（以下、学生アドバイザーとする）の育成手法は各大学に委ねられているのが現状である。そこで、学生アドバイザーに対する育成事例を広く共有することは、それぞれの大学における学生アドバイザー育成の参考となりうる。そこで、本稿の目的は、学生アドバイザー育成の実践事例および成果を共有することにある。京都外大リーダーズ・スクール（GLS）は、学生の成長支援を目的とした取り組みとして 2013 年に発足した。そこで活動する学生アドバイザーは、成長支援プログラムの企画・運営を通じて、プログラムに参加する学生の「気づき」にアプローチすることが求められる。そのための知識・スキル・態度を活動全体を通じて育成している。今回は GLS に依頼された中学校キャリア教育の企画・実践を通じて、学生アドバイザーとしての他者との関わり方、ファシリテーション力などの能力育成につながったことが推察された。

キーワード

学生による学生支援、学生アドバイザー、育成、関わり方、ファシリテーション

1. はじめに

1.1 学生による学生支援の広がり と 京都外国語大学における活動

近年多様化する学生に対する支援として、学業や将来目標の設定、学生の成長支援といった支援が正課教育や正課外活動やプログラムなどで幅広く実施されており、学生同士による支援も広く導入されている（岸岡ら、2024）。

京都外国語大学においても、学生による支援の取組として、それぞれの部署の内容に特化した活動が実施されている。ランゲージセンターにおけるピアチューターや NINJA CAST, 国際部における国際部 Student Ambassador (S.A.), 障がい学生支援室における学生サポーターがそれにあたる。本稿で取り扱う京都外大リーダーズ・スクール（以下、GLS とする。）もそれらの取組の 1 つであり、学生の成長支援を目的とした準正課外活動と位置付けられている。ピア・サポートには学習サポートや履修相談、就職サポート、障がい学生支援、留学生支援、学生生活上の支援等、様々な形態が存在するが、GLS 学

生アドバイザーの場合は成長支援プログラムを運営するピア・リーダー（沖，2015）に最も近い取組である。

1.2 京都外大リーダーズ・スクール（GLS）における学生アドバイザー

GLSの発足は2013年で、平成24年に「西日本から世界に翔たく異文化交流型リーダーシップ・プログラム（以下、UNGL²⁾と略記）」が文部科学省大学間連携共同教育推進事業に採択され、京都外国語大学が連携校として加盟したことに由来する。その当時、多様な学生の入学等により、これまで汎用的資質・能力の育成の場として機能していた部活動やサークルなどの課外活動への参加学生の減少や、正課授業のグループワーク等に不安や問題を抱える学生が散見してきたことへの問題意識から、“リーダーシップ”をキーワードに学生の成長支援を目的とした活動につながった。

UNGLでは、西日本に所在する10の大学・短期大学が連携³⁾して、学生のリーダーシップに関する知識・スキル・マインドを養成するためにプログラムを段階的に展開している（図1）。1）国内での異文化研修（Basic Program）、2）二国間での異文化研修

（Intermediate Program）、3）多国間での異文化研修（Advanced Program）という3つのステップがそれにあたり、学生が段階的・継続的にリーダーシップとそれに関わる種々の力を伸長させることができるよう計画されている。

いずれのプログラムにおいても、学生は参加型のプログラムを体験しながら、経験を学びに変えるために参加学生同士、そして学生アドバイザーや教職員スタッフを交えたさまざまな視点からの入念な振り返りを行うのが特徴的である。

GLSの活動は、学内外からGLSへの依頼に応える活動や、大きなミッションとして、年度末に独自のリーダーシップ研修【2泊3日の合宿研修】を企画し、UNGLにおけるBasic Programとして連携校に開放している。2013年度より学生の成長支援プログラム「学生リーダーズ・スプリングスクール」を毎年実施（2019年度、2020年度はコロナにより中止）している。いずれの研修も様々な大学から参加した学生たちから非常に高い満足度を得ている。

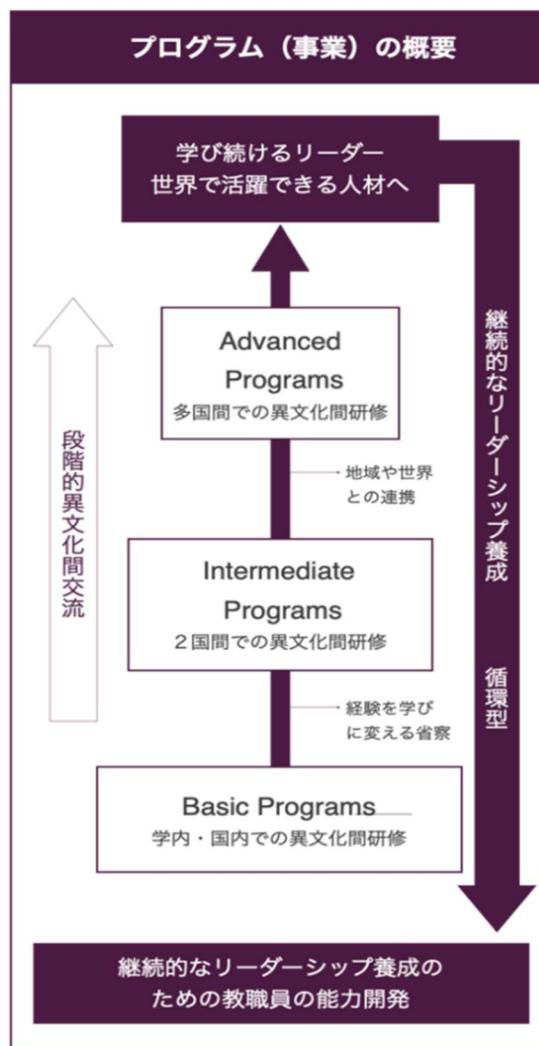


図1. UNGLプログラムの構成

GLS の学生アドバイザーは、基本的には選抜しておらず、他者との協働活動を通してあるいは学内外の学生に貢献することを通して自らのリーダーシップ知識・スキル・態度を育てる意思のある学生は誰でも受け入れている。活動期間中は、1名の専任教員のほか、学生支援部のサポートを受けている。

1.3 GLS における学生アドバイザー育成の仕組み

GLS が実施する成長支援プログラムでは、連携校から学部・学年・専門領域等の異なる様々なメンバーが集い、多様なミッションにグループ単位で取り組む。そのため、それらを企画・運営する学生アドバイザーにはさまざまな能力が求められる。GLS では学生アドバイザーの育成のために、学内や学外（UNGL 等を活用）でのさまざまな資源を活用した継続的な育成を目指している（図 2）。

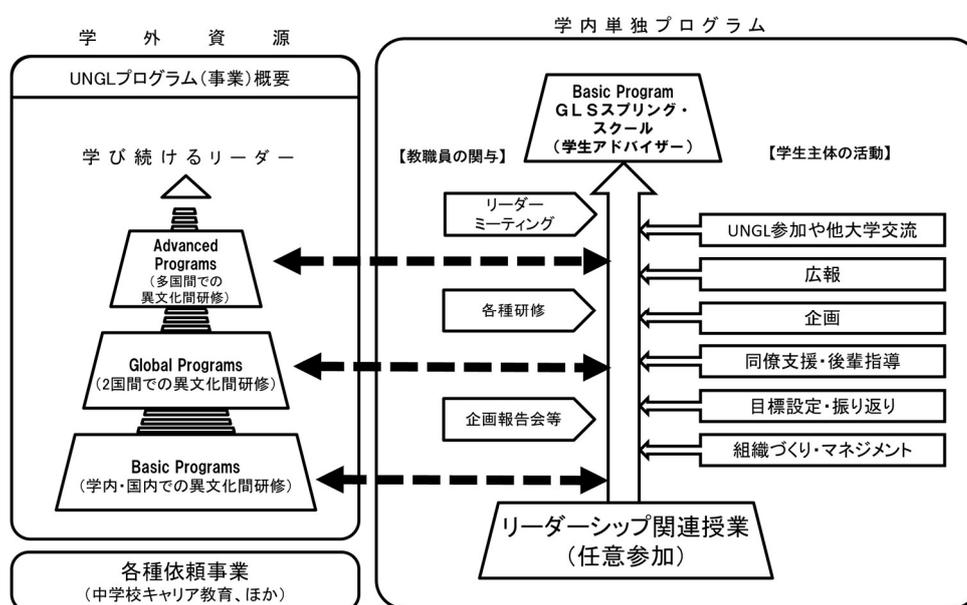


図 2. GLS における学生アドバイザー育成の仕組み

例えば図 2 のとおり、各種研修などを通じて、成長支援プログラム実施時の観察や振り返り手法を学ぶ機会は設けているわけだが、本番を想定した実践は学生アドバイザー同士では演出しづらい。そこで、実際の UNGL プログラムへの参加や学外からの各種依頼事業の実践を通じて、学生アドバイザーとしての知識・スキル・態度を磨くことを想定している。今回の事例である中学校キャリア教育はまさにその実践の場である。

2. 学生アドバイザー育成の実践

2.1 中学校キャリア教育の取組実施経緯

上記のとおり、GLS の活動は毎年年度末に実施する成長支援プログラムの企画・運営のほかに、学内外からの依頼に応える活動を実施すると記したものの一つが中学校キャリ

ア教育である。これは、今年度から始まった事業である。経緯は、大学生時代に GLS で活動をしていた卒業生が中学校の教員となり、その依頼を受ける形で実現したものである。中学3年生の担任になったことで、生徒の進路選択において、生徒たちがさまざまな選択肢を描けないまま進路を決めなければならないという現状に問題を感じての依頼であった。まず、中学を卒業してからの選択とはどのようなものがあるのか、また仮に高校進学を選んだ場合、高校を卒業した先にはどのような選択（大学や短大、専門学校、就職など）があるのかについて、具体的な選択をしてきたモデルとして大学生から話を聞きたいということ、中学生に近い立場で生徒と話をしてほしいという内容であった。これは大学生にとっても就職活動や今後の進路選択で同じような問題に直面するケースが多々あることから、GLS の学生にとっても非常に有意義な依頼であった。依頼を受けたのは 2024 年 7 月、大まかな依頼としては、キャリア教育の実施は 2024 年 9 月中旬、中学校に訪問し、5 限（13:35～14:25）～6 限（14:35～15:25）で実施する。対象は中学3年生全員（3 クラス、約 100 名）であった。

2.2 中学校キャリア教育の準備

中学校キャリア教育の実践に参加した学生アドバイザーは 18 名であった。18 名のうち、9 名は昨年度学生アドバイザーとして研修企画等を行った経験者、残り 9 名は今年から初めて学生アドバイザーとして活動するメンバーであった。今回は初めて受ける依頼ということを経験者 2 名をリーダーとして事前企画及び事前研修を以下の手順で実施した。

- ① 中学校教員からの依頼内容詳細の聞き取り：中学校の教員に大学に来てもらい、学生リーダー2名と GLS 担当教員との打ち合わせの実施（7月中旬、1回）
- ② 学生リーダーと担当教員の打ち合わせ（8月及び9月、メールや電話等、複数回）
- ③ 中学校下見および最終打ち合わせ：学生リーダー1名と GLS 担当教員が中学校へ訪問し、会場の下見（写真撮影等）および最終打ち合わせの実施（9月上旬、1回）
- ④ 学生リーダーより、他の学生アドバイザーへ事前準備のお願いと概要説明（9月上旬、メールにて1回）
- ⑤ 学生アドバイザー全体でのオンラインミーティング：夏休み中で帰省している学生も多いためオンライン（Teams）で説明と事前研修を実施（9月中旬：2回）

今回のキャリア教育において、学生アドバイザー全員に共通して必要となるポイントは次の 2 点である。

1 点目は、自分自身の中学から高校、高校から大学への進路選択に際し、「どのような選択肢があったのか」、「その選択肢のうちどの選択肢をどういう理由で選びとったのか」、「選びとったそれぞれの場所ではどのような出来事があり、どのような学びにつながったのか」「そこから中学生の皆に伝えられることは何か」という点である。これらについて、参加する学生アドバイザー一人ひとりが中学生の視点に立ってより分かりやすく伝えられる必要がある。この点については、学生アドバイザー一人ひとりが事前に自分自身の資料をパワーポイントにて作成した。

次に 2 点目は、学生アドバイザーのファシリテーション力である。キャリア教育当日

は、中学生 5～6 人 1 グループ（合計 18 グループ）に対し学生アドバイザー1 名がファシリテーションをしながら、それぞれの進路の選択肢等を考えるグループワークをする時間を設けたため、一人ひとりがその場をうまく作っていく必要がある。この点については、事前研修においてファシリテーションのポイントについて解説するとともに、先輩経験者から具体的に学ぶ時間を設けた。

2.3 中学校キャリア教育の実践

本番に実施した中学校キャリア教育の内容は以下の通り（表 1、表 2）である。

表 1 中学校キャリア教育の内容等（5 限目）

日程：9 月 19 日（木） 時間：5 限目（13:35～14:25） 場所：視聴覚教室
条件：席は 4 人 or5 人掛けのいす，視聴のみ 人数：約 100 名
目的：大学生が高校や大学，就職等それぞれのステージで何を感じ，どのように選択・行動してきたのかということを紹介することで，中学生が「自分ごと」として自分の未来に向き合うきっかけを作る
内容： 学生アドバイザーを代表して，以下のそれぞれのパートにおいて 2～3 名がプレゼンテーションを実施する <ul style="list-style-type: none"> ・【中学～高校等の選択肢，どういう選択をしたか+高校での体験】担当：2 名 ・【高校～大学等の選択肢+どういう選択をしたか+大学での経験】担当：3 名 ・【大学での特徴的な経験+今後の進路について】 担当：2 名

表 1 の通り 5 限目（13:35～14:25）については，中学生 100 名への学生アドバイザーによるプレゼンテーションの時間を設けた。事前に中学校教員への聞き取りを行った結果，中学生の中にはそもそも未来の自分自身の想像が全くついていない生徒も多いということから，5 限目の目標を『中学生が「自分ごと」として自分の未来に向き合うきっかけを作る』とした。大学生との触れ合いの中で中学生のキャリア教育を，との中学校側からのリクエストではあったが，いきなり学生アドバイザーとのグループワークを行うよりは一度先輩の事例を聞くことで，中学生自身がこれからの自分の未来を想像するきっかけになればという意図から構成を選択した。

学生アドバイザーのプレゼンテーションでは，中学生が未来の自分を想像しやすいように，「中学～高校等への選択」，「高校～大学等への選択」，「大学時代での活動」の 3 パートに分けた。学生アドバイザーについてもこれまでの人生における選択肢などを事前に聞き取りをしたうえで，それぞれの選択において特徴的なメンバーを選抜した。今回の発表では，子供のころの習いごとがこれまでの進路選択に影響している学生，小学校までは日本の学校に通っていたが，様々な事情を経て国際学校（高校）へと進学した外国籍の学生，大学進学時にあえて地元を離れる選択をした学生，自分の夢から逆算して自分の進路を選択している学生，短大から大学へと編入を決めた学生など，最終的に外国語大学を選択した学生の中でも様々な背景があることが垣間見ることができる構成とした。発表は各

人 5～6 分であった。

表 2 中学校キャリア教育の内容等（6 限目）

日程：9 月 19 日（木） 時間：6 限目（14:35～15:25） 場所：各教室
条件：1 クラス（約 30 人）を 2 つの教室に分け（15×15），それぞれ教室で 5 人ずつのグループを作る（6 チーム）。3 クラス同様の形態にし，それぞれのグループに大学生 1 名がファシリテーターとして配置する。
目的：5 限目のプレゼンテーションを受け，今度は中学生が自分自身のことについて話したり，同じクラスの仲間の話の聞いたりすることによって自己理解につなげ，今後の自分自身の未来に対するイメージを持つ
内容：大学生がファシリテーションを担当しながら，それぞれの項目について話し合う ① 自己紹介（大学生，中学生） ② 以下の質問事項について，グループごとに話し合いを進める ・自分の好きなことや得意なことは ・どういう時に幸せって感じる ・嫌いなもの/ことや絶対にやりたくないことは ・未来（15～22 歳くらい）で「こういうことをしてみたい」がありますか ※大学生は自分自身の中学生の頃の話も交えながら，楽しく話せる場をつくる
Point ・中学生がどうやったら話しやすいかを常に考えて質問をしよう ・質問に対しての解答例として自分のことを話してみよう ・質問に対して答えにくい生徒については臨機応変に対応しよう ・自分が楽しむことが，その場を作っていくことを理解しよう

表 2 の通り，6 限目（14:35～15:25）は学生アドバイザーとのグループワークを実施した。6 限目の目標は，5 限目で先輩の進路選択事例を聞いたうえで，中学生が自分の過去や現在の興味関心や未来への希望について自分の言葉で語ることで自己理解を深めることとした⁴⁾。内容については，表 2 に示す項目についてそれぞれのグループの担当となった学生アドバイザー（ファシリテーター）が中学生に質問等を駆使しながら進めた。これらの実施にあたり事前のファシリテーション研修では，表 2 の 4 つの POINT について，ファシリテーション経験のある先輩たちから具体的にどのような場面でそれぞれの POINT が必要になるかを想定した事例共有（ケーススタディ）を実施した。また，実際は 18 グループに 18 名の学生アドバイザーが張り付いたわけだが，5 限目に発表をしていないメンバー（18 名中 11 名がそれにあたる）も自分の進路選択ストーリーを作成していたため，うまくグループ内で話が進まないときは自分のストーリーを活用しつつ進めることも事前に共有されていた。なお，グループワークではそれぞれのグループによって進捗の状況が違うことが想定されたため，終了時間だけを共通にした。

3. キャリア教育実践の評価

3.1 中学校教員および生徒からの評価

ここでは、キャリア教育実施後の中学校教員および生徒からのコメントをまとめたものを紹介する。

【中学校教員からのコメント】

(良かった点)

- ・外国語大学でも色々な職業を目指せることを子どもたちが知れてよかった
- ・様々なことにチャレンジしている姿を知れてよかった
- ・大学生からの熱いメッセージにうなずいている子がたくさんいた
- ・色々な選択肢を具体的に話してくれて、イメージがわいている生徒がいた
- ・歳の近い大人と話せたことによって自己開示がしやすかった
- ・生徒が話した内容を肯定的に捉えてくれていたため、生徒が自分のことを話しやすそうだった
- ・生徒が話した内容を深堀してくれていたため、自然と自分のことをどんどん話していた。
- ・生徒本人に興味を持ってもらっていることがこちらにも伝わってくるくらい温かく接してくれていた。

(改善点)

- ・進路の選択肢が狭そうな印象を受けた。(色々な選択肢はあるものの、言語がメイン)
- ・中学生が理解できない単語や内容があった(付け加えて話していただければ嬉しい)
- ・班の中で、盛り上がっている生徒とそうでない生徒で二極化している場面があった
- ・50分間の中で、間延びしてしまっていた。学生の入れ替えなども検討できるかも

全体的には良い評価を得ることができた。普段の授業中のグループワークではほとんど話さない生徒が一生懸命話をしているのを見て驚いたという言葉も実際にいただき、学生アドバイザーにとっても大きな自信につながった。

【生徒からのコメント】

全体的に、大学生の話の聞いたり実際の交流をしたりすることによって、多くの生徒の考えの幅を広げることができたことがコメントから窺い知ることができた。また、自分の将来や興味があることなどについては、たとえ自分のクラスの仲間であってもなかなか話をするのではなく、今回を機に仲間の知らない一面を知れたことの新鮮さを語るコメントも大変多かった。中学生にとっては、自分の将来を展望することに難しさがあったようだが、大学生という身近なモデルに自分自身を重ねてみることで、自分自身のことを考えるきっかけにつながっている描写を多く見ることができた。

以下にいくつか印象的なコメントを紹介したい。

- ・今やっているスポーツや友人関係などはあまり将来に関係ないと考えてしまうが、そのスポーツが仕事につながっていたり、友人の縁があったりと今を大切にしていけることが必要だと分かりました
- ・自分の得意を伸ばすためにつき進んで行くことは将来の自分へのチャンスになったり、助け舟となると深く考えることができました
- ・今日改めて大学生の方と話して、自分の好きなことやこれからしたいことを他の人と共有したり口に出すことで、自分の目標や目指すところをより明確に決めることができました
- ・大学生の話を聞いていくうちに、クラスメイトの知らない一面も知れたし、高校や大学に入ったときの印象がとて強くなったように感じられた
- ・自分をはじめは一番学力に合わせるのが良いと思っていたけど、自分の将来も重ねてみることも大切だと思いました
- ・自分の好きなことや将来やりたいことは自信をもって言葉に発することが大切であることを学んだ
- ・自分は将来についてあまり考えたことはなかったけど、さまざまな選択肢があり自分に関わるようなことも大学生の話を聞いて多かったため、とても良い授業で自分の考えも少し変わりました
- ・自分が困っていたり言うことに迷っていたら、また質問で返してくれたりして発言しやすかった。また分かりやすい言葉で聞いてくれたりと、私たちに合わせて話してくださったりしたから答えやすかった
- ・たくさん質問してくださって、自分のいきたい高校や自分のしたいこと苦手なことをしゃべることができました
- ・常に相づちや拍手があったので、自信をもって話していいんだなと安心することができました

学生アドバイザーのファシリテーション力や生徒とのかかわり方について、上記の中学校教員や生徒のコメントから一定の成果につながるコメントが複数得られた。これは、学生アドバイザーに求められる能力として成長支援プログラム参加者のアンケート結果から明らかにした「自己理解につながるアプローチ」「参加者との向き合い方」「ロールモデルとしての存在」（岸岡ら，2024）とも通じるところでもある。このことから、GLSの学生アドバイザーの育成に対して今回のキャリア教育も十分に関与していることが推察された。

3.2 学生アドバイザーの学び

中学生キャリア教育終了後に学生アドバイザーの振り返りを実施した。学生アドバイザーからは、自分自身の成果として以下のようなコメントを得られた。

- ・自分のこれまでの歩みを言語化することが難しかったが、いかに中学生にとって分かりやすい発表になるかを意識していて、それを中学生たちがうなずきながら聞いてくれたのがとても嬉しかった
- ・雰囲気よくファシリテーションに徹することができた

- ・生徒たちが皆気持ちよく話せるように、話す量などを意識してファシリテーションを行うことができた
- ・リアクションに意識を置いて、大きめに反応をした
- ・最初は生徒の話にアシストする感じだったが、そのうち生徒同士で話が回っていくようになったのでそこは良かった
- ・受験生としての悩みを細かく聞くことができた
一方、改善点や難しさという点で、以下のようなコメントを得られた。
- ・中学生にとって理解しにくい言葉を使ったことがあって、そこをうまく説明するのが難しいと思った
- ・全員に話してもらおうと思ったが、自分と生徒の1対1の集団面接のようになって焦りました
- ・すでに進路が決まっている生徒とそうでない生徒がいて難しかった。うまくファシリテーションをできなかった
- ・もう少しアイスブレイクの時間を設けた方が良かった（信頼関係までに持っていけないと話を深掘りできない）
- ・実感として、名前やニックネームを紙に書いたりして覚えておく必要があると思った
- ・自分がうまくやれているのかどうか不安で余裕がなかった

学生アドバイザーの振り返りから成果については共通の実感が多く見られたが、先輩アドバイザーと今回初めてファシリテーションを担当した新米アドバイザーとの間で大きな違いとして、「言葉遣い」や「場の雰囲気づくり」に関することがあげられた。例えば「中学生にとって理解しにくい言葉を使ったことがあって、そこをうまく説明するのが難しい」といったコメントは先輩アドバイザーからは聞こえてこなかった。このことから、その場に合った言葉遣いの選択というのは、新米アドバイザーにとって大きな壁とはなるが、裏を返せばアドバイザーとしての大きな学びにつながるポイントとなることが推察される。また、「実感として、名前やニックネームを紙に書いたりして覚えておく必要がある」も新米アドバイザーの実感である。後から確認すると、先輩アドバイザーたちは中学生の名前を覚えたり、ニックネームで会話をしたりなど、個人的に実践していたことが分かった。これらの配慮が参加者と学生アドバイザーとの間に良い場を作るということを実感して習慣化していることが考えられる。新米アドバイザーはそういった点において未経験なため、その都度の実践において「気づき」を得て、次の自分の配慮行動の進化へとつなげていくと推察される。

4. まとめ

今回のキャリア教育、しかも中学生を対象に実施することは、学生アドバイザーにとっては初めての経験で、その点において難しさを大いに感じた実践であった。しかし、だからこそその成果を得ることができ、良い点、改善点をそれぞれ自分の実感として感じられたことは今後の活動に大いに励みになると考えられる。また、アドバイザー育成の立場としては、新米アドバイザーと先輩アドバイザーとの認識の差から、アドバイザー育成における育成ステップを検討するための手掛かりにもなった実践であった。

学生アドバイザーとしての活動を進めるにおいて、より良い学びを他者に届けるためにはさまざまな面で学ぶ必要があり、研修などを通じてトレーニングを行うわけであるが、こうした外部実践を通じた学びは、何にも代えがたいものである。

我々を信じて依頼して下さった中学校関係者の皆さまに心よりお礼申し上げたい。

注

- 1) 準正課とは、大学が一定の教育的な意図をもって取り組む活動。(文部科学省教学マネジメント特別委員会第10回資料 https://www.mext.go.jp/content/1422840_2.pdf)
- 2) 通称「西日本学生リーダーズ・スクール」、英語名称「University Network for Global Leadership Development in West Japan」
- 3) 令和6年時点の連携校数は19校(14大学, 5短期大学)
- 4) 自己理解を深めた後、実際の進路イメージとつなげることについては次の研修へと譲るため、今回の事例の範疇とはしていない

参考文献

- 沖裕貴(2015)「「学生スタッフ」の育成の課題—新たな学生参画の 카테고리を指して—」,『名古屋高等教育研究』15,5-11.
- 岸岡洋介・山野洋一・深谷麻未・岸岡奈津子・清水栄子(2024)「学生アドバイザーに求められる能力と実践を通じた成長」,『アカデミック・アドバイジング研究』2,17-24.

編集後記

『アカデミック・アドバイジング研究』第3号をお届けします。本号には実践報告2編が掲載されています。ご投稿くださった皆様、点検に携わってくださった皆様に篤く御礼申し上げます。



◇今号の実践報告は、中学生へ繋がる仕掛け、充実した留学経験の拡がりなど、アカデミック・アドバイジングの深化と広まりが発展する今を象徴するものです。具体的な支援のイメージの教示をありがとうございました。また会員の皆様も、日々展開しているアドバイジングはどれも正解であり、それゆえ本協会誌を「情報交換」のように活用してくださると大変幸甚です。(タケノコの里から)

◇本協会の『アカデミック・アドバイジング研究』第3号を、発行させていただきます。先ごろ、中教審から『知の総和』答申が出されました。高等教育を取り巻く状況が厳しさを増す中、大学の役割は、学生一人ひとりの能力を最大化することであると再認識しました。『アカデミック・アドバイジング研究』誌が、その活動の一助となることを願っています。(♡)

◇アカデミック・アドバイジング研究も第3号の発行となりました。貴重な実践を報告してくださった投稿者のみなさま、ありがとうございました。第4号も、より多くの会員のみなさまのご投稿をお待ちしております。(はーべすと)

◇皆様、「アカデミック・アドバイジング研究第3号」をお読みいただき、ありがとうございます。貴重な実践をご投稿いただいた寄稿者様に心より感謝申し上げます。パンデミックの影響で一時制限されていた留学や学生間のピアラーニングが再び広がりを見せ、人と人とのつながりや対話の大切さを改めて感じる機会が増えています。2020年代後半を迎える中で、アカデミック・アドバイジングの役割はさらに重要性を増していくことでしょう。次号となる第4号でも、皆様の新しい取り組みや研究成果のご投稿を心よりお待ちしております。どうぞよろしく願いいたします。(Hana)

◇このほど示された中央審議会「我が国の『知の総和』向上の未来像～高等教育システムの再構築～(答申)」に、学修者本位の大学教育におけるアカデミック・アドバイジングの可能性が言及されました。本協会誌の果たす役割が一層増す兆しです。そのためには、とにかく続けること。皆様のご協力を引き続きよろしく願います。(Horse)

編集委員会

馬本 勉 (委員長) 竹山 優子 (幹事)

私市 佐代美

嶋田 みのり

宝来 華代子

アカデミック・アドバイジング研究 第3号

Journal of Academic Advising in Japan, Vol.3

発行 2025年3月31日

日本アカデミック・アドバイジング協会 (代表 清水 栄子)